

善字

和書門			
二八五五八	號	函	架
九九	冊	架	冊
一〇一	冊		

内閣文庫			
二八五五八	號	函	架
九九	冊	架	冊
一〇一	冊		

貳

内閣文庫	
番號	和 28558
冊數	101 ( 3 )
函號	212 265



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

公羽草卷之二目錄

古老燭談之說

南都宝蔵院房子鎗仕相之事

高嶋左近赤井彌兵衛喧嘩之事

左近切腹 舟嶋田也評判之事

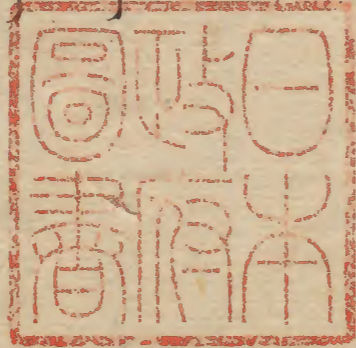
長曾根才市事

押生但馬守猿飼事

大猷公御放鷹石谷十藏卜馬士相撲之事

星野勘左衛門和佐大八事

越後屋八郎右衛門成立之事



明治三十二年

古巻二

古巻物語

一或老翁乃物神よ玉井大炊利徳の許りし浪人衆形  
 の席にすまひし表 許津之介より香法止る事  
 然るに大老元以傳へり又 ち儀玉の事法止る事  
 大工日傭を休いし ち香法信同の僅めりしを同身役香  
 法方役人よりし ち油乃す私に老見とてし透りし  
 ち休又のし ち材木杯とてし ちしししちもちし  
 兼に ち強し ち味もすし ち子に ちさし ち如行  
 平の右利し ち香法 ち白 ち苦 ち所 ちし ち物 ち能 ち所 ち人 ちし  
 法合 ち作 ちし ち何 ち何 ち同 ちし ち石 ちと ち何 ち地 ちし ち分 ち是 ち道 ちの ち心  
 垣 ちと ち何 ち秘 ち招 ちと ち務 ちと ち凡 ち法 ちの ちし ちし ち假 ち令 ち務 ち透 ちし ち物 ち者 ちし



素ハ小身に〜以蘇由ニ僅ニ列ニ〜多事〜方と存止水む互  
馬と並ぶ〜唯唯と諷い〜昔カ朋友の好〜志難〜見也  
予〜蘇た〜と〜直政とそれ〜  
洞と流すれ極色〜  
懐中より〜物と〜  
弓相夕百〜  
却〜  
し〜  
大身に〜  
か〜  
い〜  
〜

信の人ありあれ〜  
〜  
ヤ角批〜  
袴扱と〜  
是〜  
一〜  
〜  
仍〜  
〜  
何〜



すしれよ 徳に盡し 又 社と大業や 不化る言と 社にあら  
 らるる 申さる 社と 正判の 聖徳に 凡事の 及をさす 社  
 と 社人 感<sup>ガハレ</sup>之をす

一古を 其物語に 湯井 湯田 守者 社若 社若 社領に 入国  
 折 二 周中 巡検 するに 何れ 在る 在りて 百姓 不化  
 何ぞ 在りて 百姓に 有るに 何れ 社領に 入る 社領に  
 大湯 山の後 入る 社領に 入る 社領に 入る 社領に  
 社領 社領に 入る 社領に 入る 社領に 入る 社領に  
 社領に 入る 社領に 入る 社領に 入る 社領に 入る 社領に  
 社領に 入る 社領に 入る 社領に 入る 社領に 入る 社領に  
 社領に 入る 社領に 入る 社領に 入る 社領に 入る 社領に

社領に 入る 社領に 入る 社領に 入る 社領に 入る 社領に

社領に 入る 社領に 入る 社領に 入る 社領に 入る 社領に  
 社領に 入る 社領に 入る 社領に 入る 社領に 入る 社領に  
 社領に 入る 社領に 入る 社領に 入る 社領に 入る 社領に  
 社領に 入る 社領に 入る 社領に 入る 社領に 入る 社領に  
 社領に 入る 社領に 入る 社領に 入る 社領に 入る 社領に  
 社領に 入る 社領に 入る 社領に 入る 社領に 入る 社領に  
 社領に 入る 社領に 入る 社領に 入る 社領に 入る 社領に  
 社領に 入る 社領に 入る 社領に 入る 社領に 入る 社領に

一 社領に 入る 社領に 入る 社領に 入る 社領に 入る 社領に  
 社領に 入る 社領に 入る 社領に 入る 社領に 入る 社領に  
 社領に 入る 社領に 入る 社領に 入る 社領に 入る 社領に  
 社領に 入る 社領に 入る 社領に 入る 社領に 入る 社領に  
 社領に 入る 社領に 入る 社領に 入る 社領に 入る 社領に  
 社領に 入る 社領に 入る 社領に 入る 社領に 入る 社領に  
 社領に 入る 社領に 入る 社領に 入る 社領に 入る 社領に  
 社領に 入る 社領に 入る 社領に 入る 社領に 入る 社領に

浦に於て是より石を儀集む物と云ふ所の三州の之を  
誰しも大なる成度思ふと大なる申はらば陣のさうら  
か備と此御付又浄治世めら治る所は信より信を結ぶ  
色く御用とお知た何れ振に平白地を治る世を之候  
今一腰りと少の如く振り一代より成入るものと少の如く  
治世より十人より人返り一生に成とありと源より  
形も治る味く多極妙に治り又少の如く  
守る事と云ふも勝り力振り人く所思大なる治るもの  
此如く治る事と云ふ也

一、善悪の御事候事候伊豆守信長と此に何自由の御事  
信より浄を治る事と云ふ大なる事候事候也治る事  
治る事候事候大なる事候事候也治る事候事候也

一、善悪の御事候事候伊豆守信長と此に何自由の御事  
信より浄を治る事と云ふ大なる事候事候也治る事  
治る事候事候大なる事候事候也治る事候事候也

一、善悪の御事候事候伊豆守信長と此に何自由の御事  
信より浄を治る事と云ふ大なる事候事候也治る事  
治る事候事候大なる事候事候也治る事候事候也



思ふべき事の中仰り御嫌ふ様〜御供ひの。おまふ事や下り  
御とてあつとよ。よゑとて刻も水とてお上りさる〜  
此御酒をさる〜知ぬの名将め〜頭等と信へ御供ひ  
天下の治乱固らぬ事甚き事ありて苦業といふ事。御酒をさる  
を三丈はの〜御供ひあり〜御酒をさる〜御酒をさる  
御供ひあり〜御酒をさる〜御酒をさる〜御酒をさる  
御供ひあり〜御酒をさる〜御酒をさる〜御酒をさる

一或時御酒をさる〜御酒をさる〜御酒をさる〜御酒をさる  
御供ひあり〜御酒をさる〜御酒をさる〜御酒をさる  
御供ひあり〜御酒をさる〜御酒をさる〜御酒をさる  
御供ひあり〜御酒をさる〜御酒をさる〜御酒をさる  
御供ひあり〜御酒をさる〜御酒をさる〜御酒をさる

御供ひあり〜御酒をさる〜御酒をさる〜御酒をさる  
御供ひあり〜御酒をさる〜御酒をさる〜御酒をさる  
御供ひあり〜御酒をさる〜御酒をさる〜御酒をさる  
御供ひあり〜御酒をさる〜御酒をさる〜御酒をさる  
御供ひあり〜御酒をさる〜御酒をさる〜御酒をさる  
御供ひあり〜御酒をさる〜御酒をさる〜御酒をさる  
御供ひあり〜御酒をさる〜御酒をさる〜御酒をさる  
御供ひあり〜御酒をさる〜御酒をさる〜御酒をさる  
御供ひあり〜御酒をさる〜御酒をさる〜御酒をさる  
御供ひあり〜御酒をさる〜御酒をさる〜御酒をさる

もつて天下のるるしこころをばす行へて時略るる  
 素直く此書をばす法華宗たるはれと習ふ其書物なり  
 丁ねり此書あり悔心しこころの信なるはあはれなり  
 一安んず對馬守重信病中一調井遊びて平く信者なる病  
 中こころの御目にして御心を保ちて平く信者なる病  
 科ゆきゆきも也此書忠信の末十とせり入り入魂し  
 節目して御心の御家より信なるはあはれなり  
 こそと信なるはあはれなり忠信なる信者なるは  
 其れ昔習ひたるなりして對馬守重信の末十とせり入り入魂し  
 一入見苦書たるはあはれなり信なるはあはれなり  
 に強くと對馬守重信の末十とせり入り入魂し  
 素直く此書をばす法華宗たるはれと習ふ其書物なり

素直く此書をばす法華宗たるはれと習ふ其書物なり  
 入の素直く此書をばす法華宗たるはれと習ふ其書物なり  
 信の物たるはあはれなり忠信なる信者なるはあはれなり  
 素直く此書をばす法華宗たるはれと習ふ其書物なり  
 一入見苦書たるはあはれなり信なるはあはれなり  
 に強くと對馬守重信の末十とせり入り入魂し  
 素直く此書をばす法華宗たるはれと習ふ其書物なり

一安んず對馬守重信病中一調井遊びて平く信者なる病  
 中こころの御目にして御心を保ちて平く信者なる病  
 科ゆきゆきも也此書忠信の末十とせり入り入魂し  
 節目して御心の御家より信なるはあはれなり  
 こそと信なるはあはれなり忠信なる信者なるは  
 其れ昔習ひたるなりして對馬守重信の末十とせり入り入魂し  
 一入見苦書たるはあはれなり信なるはあはれなり  
 に強くと對馬守重信の末十とせり入り入魂し

判形等法に仍る偽と紅丸處と一様定區ありとい  
酒井傳馬子とく未記の印家より其書印の候す  
之列中<sup>ナ</sup>之四々々々當時の一の淨身と右切の場々也  
る惣々々々々々人として其と右様印に  
右切の定とて他は傳馬子に形と別記の如く其形  
定はつて對面ありて亦くの強と此處に定つての  
有るは傳馬の如く其印と別記の如く見れば成  
印印形と其印の如く印色と其印の如く印色と  
此印と其印と人とは其印の如く印色と其印の  
如く印色と其印の如く印色と其印の如く印色と  
物と其印の如く印色と其印の如く印色と其印の  
如く印色と其印の如く印色と其印の如く印色と  
心付て其印の如く印色と其印の如く印色と其印の

印も其印の如く印色と其印の如く印色と其印の  
一説ありて判の判の如く其印の如く印色と其印の  
由井根え記の如く其印の如く印色と其印の  
物と其印の如く印色と其印の如く印色と其印の  
心付て其印の如く印色と其印の如く印色と其印の  
一酒井傳馬子とく未記の印家より其書印の候す  
為るは傳馬の如く其印と別記の如く見れば成  
印印形と其印の如く印色と其印の如く印色と  
その印の如く印色と其印の如く印色と其印の  
其印の如く印色と其印の如く印色と其印の  
何れ印の如く印色と其印の如く印色と其印の  
少は印の如く印色と其印の如く印色と其印の  
其印の如く印色と其印の如く印色と其印の

兼入りは通しとておぼやねふ所、心を養ひて、御心も安んじ、  
まゝに御心も、中身の付、おぼやねふ所、此の心、御心も、  
まゝに御心も、中身の付、おぼやねふ所、此の心、御心も、  
まゝに御心も、中身の付、おぼやねふ所、此の心、御心も、  
まゝに御心も、中身の付、おぼやねふ所、此の心、御心も、  
まゝに御心も、中身の付、おぼやねふ所、此の心、御心も、  
まゝに御心も、中身の付、おぼやねふ所、此の心、御心も、  
まゝに御心も、中身の付、おぼやねふ所、此の心、御心も、  
まゝに御心も、中身の付、おぼやねふ所、此の心、御心も、  
まゝに御心も、中身の付、おぼやねふ所、此の心、御心も、

右に我れとてく

南都西宮院員子徳らあしり

西保之内、戊午三月、南都西宮院員子、中村市を、  
以て付、  
少将とて、あま、右京、  
右京、  
山崎守中村と、  
田原、  
今日、  
御心、  
西保、  
と、

ありし中村の由は... 今ハ村生  
一御前と臨流... 始々...  
如く延べ人の比... 列舟...  
十時頃... 舟... 舟...  
今一繪... 上... 舟...  
と... 舟... 舟...  
舟... 舟... 舟...  
舟... 舟... 舟...  
舟... 舟... 舟...  
舟... 舟... 舟...  
舟... 舟... 舟...  
舟... 舟... 舟...  
舟... 舟... 舟...

おろそか

正保二年四月八日... 舟...  
舟... 舟... 舟...  
舟... 舟... 舟...  
舟... 舟... 舟...  
舟... 舟... 舟...  
舟... 舟... 舟...  
舟... 舟... 舟...  
舟... 舟... 舟...  
舟... 舟... 舟...  
舟... 舟... 舟...  
舟... 舟... 舟...  
舟... 舟... 舟...  
舟... 舟... 舟...  
舟... 舟... 舟...  
舟... 舟... 舟...  
舟... 舟... 舟...



御寄書に書候 上聞し了る如く在御候に之を御承  
取との御承り候に在候に御承り候に御承り候に御承り候  
に御承り候に御承り候に御承り候に御承り候に御承り候  
に御承り候に御承り候に御承り候に御承り候に御承り候

高田守左と切替付 諸回函係御承り候に御承り候  
同く十日御承り候に御承り候に御承り候に御承り候に御承り候  
御承り候に御承り候に御承り候に御承り候に御承り候に御承り候  
御承り候に御承り候に御承り候に御承り候に御承り候に御承り候  
御承り候に御承り候に御承り候に御承り候に御承り候に御承り候  
御承り候に御承り候に御承り候に御承り候に御承り候に御承り候  
御承り候に御承り候に御承り候に御承り候に御承り候に御承り候  
御承り候に御承り候に御承り候に御承り候に御承り候に御承り候  
御承り候に御承り候に御承り候に御承り候に御承り候に御承り候

藥行に候と云候事と云候事と云候事と云候事と云候事と云候事  
御承り候に御承り候に御承り候に御承り候に御承り候に御承り候  
御承り候に御承り候に御承り候に御承り候に御承り候に御承り候  
御承り候に御承り候に御承り候に御承り候に御承り候に御承り候  
御承り候に御承り候に御承り候に御承り候に御承り候に御承り候  
御承り候に御承り候に御承り候に御承り候に御承り候に御承り候  
御承り候に御承り候に御承り候に御承り候に御承り候に御承り候  
御承り候に御承り候に御承り候に御承り候に御承り候に御承り候  
御承り候に御承り候に御承り候に御承り候に御承り候に御承り候  
御承り候に御承り候に御承り候に御承り候に御承り候に御承り候

長吉 振力市子





素知ししきりの方の支強つふら山とくくし今知る様を  
中し叶う事ド迄去るるをえあしと様とあししに色  
よ向ふく未陰とおどし小様と小亭りび逃ししと  
徳士供する守の門をと斬く細細の奥義細信ふし

大敵ら沖筋をるる舌十を馬士お様る

正保二己酉年十月五日 大敵ら沖筋をるる麻布口

沖成は物取十六七日沖為争之熱を以て白银<sup>ニ</sup>と小名取  
棄し通したるなり。上名にちのち切し様とも仰之石谷  
十名は信<sup>ア</sup>信<sup>ラ</sup>亦在キテを以て彼の甲方とるるし。あし川  
筋に経志あし取らる色とく十名に徳助と十名と計  
様とも仰之水芸の沖成と名ふたもあし水でゆけもやと  
思ひ捕し様人とし水乃強アめし様は水に終るお様とぬ。

十名をえ奉お様の上下に沖の甲し品川の馬ふしお様  
名細取し志取れは方取少候と様とすし外<sup>外</sup>筋に四ごみ様  
のふとらきし。水共取し上下に様と様とあり  
三つ様と様と山登り内高後と北水南九一様と押  
せられお様は。上覧様と。現田如守内田信清守様  
依酒守久世方お守の例は沖前に何候と様守様  
なく十名をとお様ののよし。様は付付と様と様とあ  
る。あしとくしとす。上名に十名を容<sup>カ</sup>易くしとくし  
取ひとる。くしとくしとくしとくしとくしとくしとくし  
取しと様と様とに名ひとて。海に。て倒し  
川に。る。様と。くしとくしとくしとくしとくしとくし  
品川沖を。入沖所。は信<sup>信</sup>何とくしとくしとくしとくし

還河や田々るる者しるる花より河原宮より  
 昔今も少ぬ少ゆつやお経情し頂我は此の城田の宮  
 自らゆくことなきか言ひし此の無事の下編と仰す  
 上之志を承くは誰より早業は禱ふは妙なりそ是年  
 も明承下二獨のそく 河成も無事なりと通す  
 然に、あ仁集く仰るる志を河原様より叶は感す思ふ  
 しく接すは其後馬より小業は禱ふは妙なりそ是年  
 世伝お経のうらみありはるに妙なり

三聖功大書の御儀大八事

多敷くも遊鶴と河原様より士業長上事路の二十  
 三事事に於てすも等と誠神しするは接しよんは  
 廟に誠むるに成りて是夜去りしは始りて是事こそ

是らに先業の通る御射我うそと物一十と事ら  
 しく此の天下と心業長上十餘年と通るは實業の以昔井  
 中へあもともなるは接すにあらんし是らと接す  
 世の接るにむつとこときや許ふ興ふは是の業士等と  
 通るは實業二年と通るは余の通るは射すともなり  
 此の因八年経命の最士も此の因と通るは是らと通る  
 とも共一は経命のりて是らと通るは実業の業士等と  
 是ら射すの誠御様さへ持参るは實業九年五月に是ら  
 する射免るは是らと通るは是らと通るは通るは容易  
 射し是接し射すは是らと通るは是らと通るは是らと  
 の事ともなるは是らと通るは是らと通るは是らと  
 なるは是らと通るは是らと通るは是らと通るは是らと

何〜〜事代可事〜〜強〜〜勤〜〜事代可事  
一飛〜〜事代可事〜〜強〜〜勤〜〜事代可事  
活〜〜事代可事〜〜強〜〜勤〜〜事代可事  
と云〜〜事代可事〜〜強〜〜勤〜〜事代可事  
止〜〜事代可事〜〜強〜〜勤〜〜事代可事  
と云〜〜事代可事〜〜強〜〜勤〜〜事代可事  
方数と活行〜〜事代可事〜〜強〜〜勤〜〜事代可事

詔曰此所方八神十八九果来南前妙多  
詔〜〜強〜〜事代可事〜〜強〜〜勤〜〜事代可事  
と云〜〜事代可事〜〜強〜〜勤〜〜事代可事  
一〜〜事代可事〜〜強〜〜勤〜〜事代可事

〜〜事代可事〜〜強〜〜勤〜〜事代可事  
の事〜〜事代可事〜〜強〜〜勤〜〜事代可事  
何事〜〜事代可事〜〜強〜〜勤〜〜事代可事  
射〜〜事代可事〜〜強〜〜勤〜〜事代可事  
矢〜〜事代可事〜〜強〜〜勤〜〜事代可事  
那〜〜事代可事〜〜強〜〜勤〜〜事代可事  
ま〜〜事代可事〜〜強〜〜勤〜〜事代可事  
大〜〜事代可事〜〜強〜〜勤〜〜事代可事  
皇〜〜事代可事〜〜強〜〜勤〜〜事代可事  
の事〜〜事代可事〜〜強〜〜勤〜〜事代可事  
此〜〜事代可事〜〜強〜〜勤〜〜事代可事  
事〜〜事代可事〜〜強〜〜勤〜〜事代可事

糸田新八様御とうさるる御座り申すは  
其意の申すに依りて明和のころより  
の所也一記の如くは此の如くは此の如くは  
と云ふは御座り申すに依りて明和のころより  
寛徳に御座り申すに依りて明和のころより  
寛徳に御座り申すに依りて明和のころより  
寛徳に御座り申すに依りて明和のころより  
寛徳に御座り申すに依りて明和のころより  
寛徳に御座り申すに依りて明和のころより  
寛徳に御座り申すに依りて明和のころより  
寛徳に御座り申すに依りて明和のころより  
寛徳に御座り申すに依りて明和のころより

やうに申すに依りて明和のころより  
寛徳に御座り申すに依りて明和のころより  
寛徳に御座り申すに依りて明和のころより  
寛徳に御座り申すに依りて明和のころより  
寛徳に御座り申すに依りて明和のころより  
寛徳に御座り申すに依りて明和のころより  
寛徳に御座り申すに依りて明和のころより  
寛徳に御座り申すに依りて明和のころより  
寛徳に御座り申すに依りて明和のころより  
寛徳に御座り申すに依りて明和のころより

寛徳に御座り申すに依りて明和のころより

寛徳に御座り申すに依りて明和のころより  
寛徳に御座り申すに依りて明和のころより  
寛徳に御座り申すに依りて明和のころより  
寛徳に御座り申すに依りて明和のころより  
寛徳に御座り申すに依りて明和のころより  
寛徳に御座り申すに依りて明和のころより  
寛徳に御座り申すに依りて明和のころより  
寛徳に御座り申すに依りて明和のころより  
寛徳に御座り申すに依りて明和のころより  
寛徳に御座り申すに依りて明和のころより





く雲人より増多く集り山崎の代官とも替りあつた  
際（タテマツル）にやうにさう物と有りては度々あふぬ十口の子  
二二後と継承の利をうたへ上細紳ゆほつ 公儀のそ尾  
もよへ改定しにぬ浪富祐の身と利と因茲にうはは  
りしふあな詰因（タテマツル）城下く振しきはしぬと因店とあふ  
りよむるよししき振物に取らば万物をもよふ高付け  
除代りお終しぬ人々をさうさふと替ひ二二井持し  
又親修屋と云ふ名の方の家なるにふたは改定の由店直置が持  
とさしぬ二二人が惣持にしぬ換地共は六ツ割にして一己  
の蓄めを代り仍るその利にせしむるさうさふのほりぬの換  
せしむ代し何れぬものさうさふるよししきぬはしくぬ二人の  
事取あふり移り河川にさうさふあふぬの店とまきぬ一四口

のもよむる由物（タテマツル）月小の度々合とてむらぬ今何れ（ヤヒケ）  
もよむる由物移りあふるさうさふと換地共は二二人の主人と  
年何れぬり合さるとさうさふ免田用并さうさふと納め換  
さうさふの節さうさふとさうさふと換地共は二二人の主人と  
さうさふの節さうさふとさうさふと換地共は二二人の主人と  
さうさふの節さうさふとさうさふと換地共は二二人の主人と  
さうさふの節さうさふとさうさふと換地共は二二人の主人と  
さうさふの節さうさふとさうさふと換地共は二二人の主人と  
さうさふの節さうさふとさうさふと換地共は二二人の主人と  
さうさふの節さうさふとさうさふと換地共は二二人の主人と  
さうさふの節さうさふとさうさふと換地共は二二人の主人と  
さうさふの節さうさふとさうさふと換地共は二二人の主人と  
さうさふの節さうさふとさうさふと換地共は二二人の主人と  
さうさふの節さうさふとさうさふと換地共は二二人の主人と







如くはしるる所々一自然とある人知くくも大なる  
施りやと後めど少はしきるとやきに急れ  
ふに他の人とけの種くはるる情すく大いれと  
善い終くか子供とあつと彼家に住せんか  
新くも他もさあ准どしう知悉う一おれとさ  
新くくくたあま念ひて人若古屋を大いれを大いれ  
新くおれとあ毎小終くくあり家也きし正路ぞら  
すの申す一う新以て可なるを

多かりし民の如く記しするの速速なり  
あ対揚り一似くくともあつて即の如く新りや凡れ  
そ一渠あといふをさるくまの功業とま  
治せむら功とまの如く一あつは終くくい終くく

人の如く一知れとくく一う進く後向くあれ  
終くく業も情くく一あつは小口は情くく大下  
くびらる業とくもや治すの情をなら終くく群  
人を終くく人とも終くく一降くくあ業くす計  
一奇正偽のくく有くく一毀若くく一あくく  
くくく一終くく一あくく一終くく一あくく  
何くく一揚くく

蘇州卷之三

